The name *P. pusilla* Wallich (1824) has long been used for this common Eastern Himalayan species, but unfortunately the same specific epithet had already been used by Goldie in 1822 and also by W. J. Hooker in 1823 for different plants. As *Androsace primuloides* D. Don (1825) is also a later homonym, the earliest legitimate epithet for this species is *A. primulina* Sprengel (1827).

---

6)　東部ヒマラヤ産のテンナンショウ属で，球茎が短かく太い根茎状に横にのび，3小葉からなる1葉とウラシマソウに似た花をもつ一種がある。これにはそのむち状にのびた肉穂花序の附属体が平滑な型と，下部の太まった所にいぼ状小突起を密布している型とがあり，丁度ウラシマソウとナンゴクウラシマソウのような関係になっている。

7)　タネツケバナ属の一新種で，葉柄基部に小さい耳状突起があり，マルバタネツケバナの毛をなくし頂小葉を長くしたような形をしている。

8)　シンガリラ山脈にシウリザクラに近い種類が産するが，その葉の下面に密毛のある型が見出された。花穂にある早落性の苞が大きい点も一寸変っている。

9)　東部ヒマラヤの3000 m内外の山地のチョウジザクラに近い一種で，日本のサクラ類と同様に，毛の多少，萼の形，花弁の大きさ，色などに著しい変異が見られる。

10)　今まで *Primula pusilla* と呼ばれてきたごく小形のヒマラヤ産のサクラソウの学名を命名上の理由で改めた。

□橋本梧郎：**ブラジル植物記** pp. 374 帝国書院 (1962, 3月) ¥ 800. この本は単なるブラジル植物の見聞記ではない。それにはまず著者を紹介すべきであろう。橋本氏は1934年にブラジルにわたり，ブラジル各地に採集の旅をつづけて，今は南部のパラナ州グアイラ農事試験場長であり，またセッテケーダス博物館を創設した人でもある。ブラジルに住む人々にとって色々の面で関係の深い植物50種をえらび，自筆の一ページ大の挿図を添えて解説を加えたものが第1部となっている。形態の記載はやや硬いが，よく観察の要点をとらえ，多く挙げた土名の解説や利用面の記事にはさすが現地で自ら獲得されたデータが物をいって興味深い。そしてブラジルでインゲンマメが東洋での米に匹敵するほどに常食であることや，マテ茶の代用品や偽造品が調べ上げられていることに感心するなど中々おもしろいし，参考となる。

第2部はブラジル植物探検略史であって，これも流暢な筆である。しかも適宜にそれぞれの探検で明らかになった植物の話を巧みに添えてあって，私は一気に読了し，改めてブラジルの広さと植物界の豊かさとそれに挑戦した多くの植物学者の存在を認識した次第であった。著者が1500年のブラジル発見から1636年までを本草期，次の1817年までを黎明期，1818年のマルチウスの探検出発から彼のフロラ・ブラジリエンシスの大冊の完成(1906)までの発展期，それから今日までのブラジルの植物学者による研究主体が実現した現代の4時代に区分した試みも恐らくはじめての発表として注目されよう。

日本人がもっと知っておくべき地域としても，また熱帯植物の代表を知る点でもよい参考書である。それにしても欧文の表題のないことと，引用のリンネの原文に誤植のあることは惜しまれる。　　(前川文夫)